sheng tian gong

聖天宮

the holy celestial palace

聖天宮

聖天宮は、中国台湾三大宗教（道教、儒教、仏教）の一つ「道教」のお宮です。日々の道徳を重んじ、善行に報いる最高神「三清道祖」が本尊として祀られています。開祖は台湾出身の康國典大法師です。

日本国内に現存する道教のお宮として最大級の規模を誇り、豪華絢爛な造りは天界の悠久の宮殿を思わせます。神様と皇帝の建造物しか使われない、黄色い屋根瓦と龍は遠くから目を惹きます。また、ガラスとタイルで造られた屋根飾りをはじめ、一万以上の部品を釘なしで組まれた天井、透かし彫りされた5mもある一本の石柱、4mもある一枚の板から彫られた扉は観る価値があります。

※楼閣から望む風景は見ごたえあります。

道教とは

道教は中国大陸で発祥した、中国史の起源に遡る太古の民間信仰です。神話の神々を起源とし、後の世には三国志の英雄、関羽候なども含む、様々な神様が存在する多神教です。道教は、その発展の経緯から、「神仙思想」と「老荘思想」という二つの面を持ち合わせています。

「神仙思想」とは、神や仙人の世界に到達することを目的としたものであり、特に不老不死の探求は漢方や気功とし、練丹術は原始化学として、火薬の発明に繋がりました。「陰陽」、「八卦」の概念も神仙思想より生まれ、自然摂理や人の運命までも司るものとされ、「風水」、「占術」として現代にまで影響を与えています。

「老荘思想」とは、老子や荘子などの思想家が「道」を説いたものです。「道」とは、人智を超えた計り知れないものであり、ことさらに知や欲を働かせる「人為」を無くし、「無為」で「道」に従い生きることを説いています。老荘思想を中心とした道教の世界観は、Taoism（タオイズム）として、東洋のみならず、西洋でも根強い関心を集めています。日本では平安時代に「陰陽道」「風水」など、江戸時代は倫理道徳として捉えた「朱子学」を「武士道」に取りいれられたのがよく知られています。

五千頭の龍が昇る聖天宮

five thousand soaring dragons

由来

聖天宮の不思議な秘話がここに

■康國典大法師

聖天宮の建て主は康國典大法師。四十歳半ばにして不治の大病を患い、ご本尊「三清道祖」と縁起をもたれたのを期に一命をとりとめ、完治されました。深謝の念と、何人にも神様のご利益にあやかれるお宮を建てたく建造の地を探していたところ、なんと生国の台湾ではなく日本国のこの地にとお告げを授かりました。聖天宮の名、佇まいや方角もお告げがあり、当時、正面の道、最寄の若葉駅もなかった雑木林のこの地を一から整地し昭和五十六年より着工に至りました。台湾の一流の宮大工を呼び寄せ、十五年を掛け、平成七年に聖天宮を開廟しました。